OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学院生対象の英語教育 ： 「超域イノベーション・プログラム」における実践例
Author(s)	上田, 功
Citation	外国語教育のフロンティア. 2018, 1, p. 279-284
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69799
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大学院生対象の英語教育
―「超域イノベーション・プログラム」における実践例

上田　功

1. はじめに

昨今、研究成果を国際的に発信するために、大学院生にとって英語運用能力は必要になってきているにもかかわらず、大阪大学ではこれまで大学院レベルでの正式な英語教育は、まったくおこなわれてこなかった。英語で学会発表をしたり、英語で論文を書いたりすることは、個々人の自助に委ねられていた。大阪大学では、リーディング大学院「超域イノベーション・プログラム」が平成23年度に採択された。このプログラムは修士課程入学生に対して、自分の専門に加えて分野横断的、文理融合的な教育を5年間施し、問題解決能力をもった指導者を養成しようとするプログラムである。これは複眼的なものの見方が可能ないわゆるエリートの養成を目的とするものであるので、当然のことながら、履修学生には高い英語運用能力が求められるようになり、筆者は同プログラムにおいて英語教育の責任者となり、必修科目として英語教育を開始した。これをきっかけとして、この英語教育プログラムを他の院生にも広げて、「未来共生イノベーター・プログラム」と共同の習熟度別クラス編制のカリキュラムへと拡充した。本稿はこの実践例の紹介であるが、最終的な目的は、本学の院生が、望めば誰でも個々の目的にあった英語教育を受けられるシステムを作り、若手研究者の国際的発信能力を高めることである。

2. 教育の進展

時系列で本プログラムにおける教育の進展を辿ると、最初に平成24年度から「超域イノベーション･プログラム」において、英語教育の責任者として、週1回の授業のカリキュラムの策定し、授業内容を決め、ネイティブ非常勤講師とティーム・ティーチングを開始し、特任教授と特任講師（共にネイティブスピーカー）の人事をおこなった。平成25年度には。週1回の対面授業（「超域アカデミック・イングリッシュ」）に加えて、豊中と吹田で履修生の都合やニーズに合わせて、グループ学習を開始し、より集中的に英語を訓練する機会を設けた。そして平成26年度からは、入学時にプレースメントテストを実施し、「未来共生イノベーター・プログラム」との能力別クラス編成の共同授業を開始した。またＣＤの自習教材なども活用し、多面的に英語運用能力の向上をはかっている。さらに平成26年度には、受講学生ひとりひとりの学習記録を詳しく記録した「ポートフォリオ」を作成し始め、常に個人個人の習得状況を把握し、弱点に関しては適切なアドバイスをおこなうことができる体勢を作っている。

3. 教育の方針と特色

本活動の特色は、何といっても、これまで組織として真剣に取り組まなかった、大学院生の英語教育に、正面から取り組んでいる点である。次に、教える英語の性質を明確にしている点があげられる。この取り組みでは、「教養をもった大人の研究者が使うべき英語」の習得を第一の目標に定め、一般向けの英会話学校の日常会話の口頭練習のような授業とは一線を画し、院生の学会での発表やディスカッション、そして専門分野の論文執筆を可能ならしめるコースデザインをおこなっている。さらに履修生の多様な専門分野を考慮し、院生個人のニーズに応えるべく、個人個人が必要な英語力をグループ学習や個人教授、あるいは自習教材の指定、学習方法のアドバイスといった、きめ細やかな指導をおこなっているのが大きな特色である。

4. 教育の実施効果

これまでの7年間で、履修生には確実にアカデミックな英語運用のベースが固まってきている。これまでの英語教育といえば、いたずらにネイティブスピーカーの流暢性を追い求めるだけであったが、われわれの取り組んでいる英語教育では、たとえ日本語訛りがあろうとも、また時に言葉につまろうとも、堂々と英語でやり取りができる人材を育てることが目的である。学生は各自の専門分野の国際会議や国際的共同研究の場で、また海外でのインターンシップやフィールドワークで、自信を持って英語を使うようになっている。また学生の書く専門分野での論文や報告も、年次進行に従って、より良いものになってきている。もちろん英語は、どこまで習得できれば完成であるという性質のもので

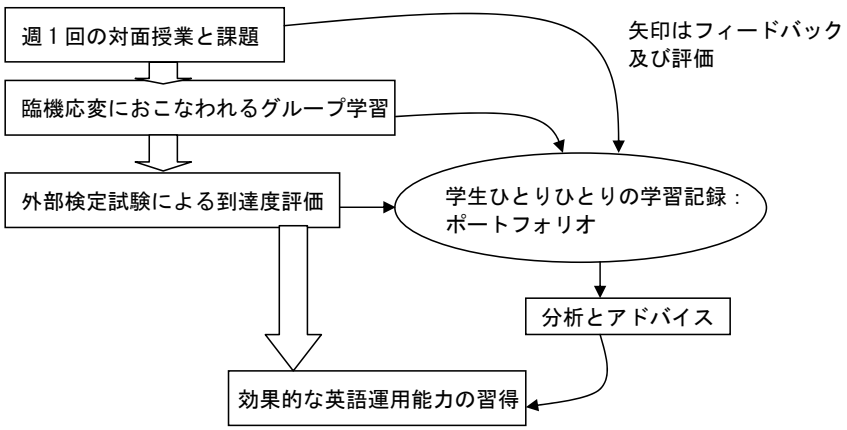
はないが、少なくとも国内外で、大阪大学の大学院生として恥ずかしくない英語コミュニケーション能力をもった学生が育ちつつあることは間違いない。

5. 教育内容と特徴

「超域イノベーション・プログラム」では入試に英語を課しておらず、入学時の学生の英語力には相当のばらつきがあった。そこで、「第一に、自分の研究分野で、最低限の発信ができること」という明確な到達目標を掲げた。そしてそれを基礎として、各自の必要とする英語力を拡張していくという計画を立てた。その詳細は次の通りである。1）週1回のネイティブ特任教授の対面授業を軸とする。1学期にはプレゼンテーションを、2学期にはライティングを中心に訓練し、相当量の課題も課す。2）それを補完するものとして、ネイティブ講師のグループ学習がある。これは学生の都合や専門領域ごとに臨機応変にグループを作り、学生の空き時間に吹田、豊中両キャンパスでおこなう。内容はScience,Nature,TIME等の記事を読み、内容についてのディスカッションが主となる。3）これらの授業での学生のパフォーマンスを詳細に記録したポートフォリオを作成する。4）

さらに年に少なくとも1回はIELTS等の外部検定試験を受験させ、客観的に英語能力の推移をチェックする。5）これらを細かく分析し、学生個人の英語運用能力を評価し、必要があれば個人指導や自宅学習のアドバイスをすることにより、弱点を補強する。これにより入学時に英語力の低かった学生は、必要最低限の運用能力を習得し、比較的高かった学生は、さらに英語力に厚みをつけることができる。この流れを図示すると次のようになる。

（概念図　英語教育の流れ）



6. 今後期待される発展–大学院全体の英語教育に向けて

現在のところこの大学院生対象の英語教育は、リーディング大学院の一部のプログラム履修生対象に実施されているに過ぎない。しかしながらこの教育方法と得られた経験は、今後リーディング・プログラム終了後も、副（専攻）プログラム化等により、大学院生全体の英語教育システムへと拡張が可能である。その際の基本的な留意事項をまとめると次の三点になる。

1）習得すべき英語を、基本的にアカデミック・イングリッシュに絞ること
2）明確な到達度評価と習熟度別クラス編成をおこなうこと
3）学生のニーズに応じたサポート体制を整えること

これまで言語文化研究科と外国語学部では、日本英語検定協会とタイアップして、英語教育の共同研究を進めてきており、年度末には目的別集中英語講座を開講したこともある。このような専門別コースと、上記のカリキュラムに組み込まれた英語教育が連動することにより、学習意欲の高い院生にとっては、さらに効果的な英語教育の機会が与えられることになる。両者相俟って、スーパーグローバル大学に相応しい、高次のレベルでの英語教育が可能になる所以である。

（付録）「ポートフォリオ」の例

NAME: X · X
FACULTY: Osaka School of International Public Policy
DATES: April 2012 – July 2014
(Last updated 10 September 2014)

1. WRITING SKILLS

I can structure a paragraph.	○
I can write an essay with an introduction, a body & a conclusion.	○
I can write an introduction with a background, thesis statement & preview.	○
I can write a cohesive essay with transition words & a focus.	○
I can concretely support the main points in a body.	○
I can organize the main points in a logical order.	○
I can write a conclusion with a summary of thesis statement/main points & a memorable finish.	○
I can cite sources.	○
I can write an effective title & abstract.	○
I can summarize a passage.	○
I can paraphrase a passage.	○
I can synthesize the views of different scholars.	○
I can write an outline.	○
I can use concessions.	○
I can define difficult terms.	○
I can write a curriculum vitae.	○
I can write a field report.	○
I can write a letter of inquiry.	○
I can write a letter of recommendation.	○
I can write an opinion letter.	○

Selected Essays

“Should Donors Give Only with Altruism?” (July 2013)

Comments: The first draft needed more paragraph organization as well as development of major points, concessions and citations. The final draft presented a clear and intriguing discussion of the motivations behind online donations with few errors of grammar and usage.

“Online Giving in Japan: A Report Toward an Understanding of Giving Behaviors.” (January 2013)

Comments: The first draft needed more citations and development of background, and these points were addressed in the second draft. Overall, a clear, well-supported analysis of online giving tools with few errors of grammar and usage.

2. PRESENTATION SKILLS

I can use effective delivery skills (confident voice, eye contact, body language & a natural pace).	○
I can use inclusive language.	○
I can structure a cohesive presentation with an introduction, body & conclusion.	○
I can present & defend an argument.	○
I can define difficult terms.	○
I can use narratives to illustrate a point.	○
I can effectively use visuals to complement a presentation.	○
I can explain a table, graph or chart.	○
I can design clear visual slides.	○
I can respond to audience questions.	○

Selected Individual Presentations

“Academics Should Be More Like Private Business Owners.” (6 July 2012)

Comments: Effective presentation with excellent delivery, good use of inclusive language, and a logical organization that convincingly explains why academics will need more business-style skills in the future. There were few mistakes of grammar and usage, and Mr. XX’s pronunciation was easy to understand. A few minor points did need some clarification.

“Another Explanation for Giving?” (7 February 2014)

Comments: A solid presentation with strong delivery and organization, excellent visuals, and clear analysis of economic theories behind money donations. There were few mistakes of grammar, usage, and pronunciation.

Selected Group Presentations

“Promoting a Project for the Use of Itami Airport Land: Hanshin Agri-Park” (25 July 2014)

Comments: Played the role of Hyogo Prefectural Governor and presented the objectives of the project. Provided a clear, logical and well-supported explanation of the benefits of the Agri-Park (a kind of agricultural theme park) for agricultural policy in Hyogo Prefecture. There were few mistakes of grammar, usage, and pronunciation.

3. ORAL SKILLS

I can express & support an opinion.	○
I can express agreement & disagreement.	○
I can express partial agreement & concessions.	○
I can use emphasis & self-clarification.	○
I can make recommendations.	○
I can ask effective questions.	○
I can effectively interrupt.	○
I can do rebuttals.	○

I can look for logical fallacies.	○
I can answer interview questions.	○
I can use rhetorical tools such as questions, slogans, hyperboles, understatements, repetitions, & similes/metaphors.	○

Selected Role-Play Debates

“Should Universities Send Scores to Students’ Parents?” (23 May 2014) Comments: Played the role of a professor. A good effort with clear English, but the debate at times lacked focus and some points needed development.

“Should the JR Tokai Linear-motor Train Route Pass Through Nara or Kyoto?” (20 June 2014) Comments: Performed an excellent job as moderator by providing vital background information, and by clearly summarizing participant’s positions. Few problems with the English. Content and organization were much improved.

4. ENGLISH STUDY ABROAD

Monash College, Melbourne, Australia

(9 August – 9 September 2012)

Attended Monash College English classes with other international students to work on listening, speaking, reading and writing skills. Also attended customized modules and interactive workshops for CBI students designed to enhance understanding of academic skills. A homestay with a local family allowed for opportunities to further improve language skills.

（注）超域イノベーション・プログラムでは1年次夏期休暇中に海外の大学で4週間の語学研修をおこなっている。

5. PROFICIENCY TESTS

Business Language Testing Service (BULATS) (20 April 2012)

CEFR	**Overall**	Listening	Reading
B2	**64/100**	56/100	70/100

BULATS Speaking (CEFR)	BULATS Writing (CEFR)
B2	B1

International English Language Testing System (IELTS) (15 September 2012)

Overall	Listening	Reading	Writing	Speaking
6.0	5.5	7.5	5.5	6.0

IELTS (27 July 2013)

Overall	Listening	Reading	Writing	Speaking
6.0	5.5	6.5	6.0	5.5